

春告げは、未だ春の訪れを告げず。

水路の巡る路地は幾分か雪解けの気配を微かに帯びるが、空気は寒々とした冬の香りを携えていた。冬とも、春とも呼べぬ狭間の季節。兄が乙女をつれてきたのは、そんな曖昧な季節の夜も更けた頃だった。

冬には似つかわしくない甘い芳香に懐かしさを覚え、眠っていた鶯太郎はふと瞳を開いた。

焦点の合わない視界は目を細めたところで変わることはない。右手を机に沿わせてひらひらと動かしでも探し物になかなか届かずに、更に顔をしかめた。ふいに指先に冷たく柔らかなものが触れる。それは鶯太郎の手をしっかりと掴むと、今度は無機質な冷たい金属を握りこませた。

予期せぬ感触に戸惑いながら、ひとまず眼鏡をかけた。四重の視界がすうっとひとつにまとまっていく。視線の先には、こちらを見つめる眠たげな瞳。部屋の明かりを遮り、小柄な少女は真上で小さな影を作り出していた。「こんなところで寝ていると風邪を引くよ、鶯太郎」

少女の唇は閉じられたまま。低く柔らかに響く声は、聞きなれたものだ。

ああ、知らぬ間に居間の隅で眠っていたのだな、とどうにか思考を働かせる。

「……兄さん」

ため息をつくように、呟いた。

少女の真後ろに背の高い男が立っている。部屋の外——薄暗い廊下にいるからか、その表情を窺い知ることはいできない。

鶯太郎は身体を起こし、目を二度瞬かせた。視線を上げ、改めて目の前の存在を確認する。ゆたかな濡れ羽色の髪と大きな瞳、透き通るような白い肌は少女が人でないことを告げていた。首を傾げた仕草に纏わりつくのは、甘い花の芳香。これは——。

「兄さん、この子はいったいどの子なの？」

「二辻向こうにあるお寺の乙女椿の子だよ」

兄——夢彦は、ややあつて音無く部屋の中に足を踏み入れる。鶯太郎は「そう」と小さく呟いて、その横顔を目で追った。冷たい外気を纏ったコートを脱ぐ兄の所作はどこか芝居めいている。あらわになつたのは、人間の男ではなく黒い獣の姿だ。白く尖った犬歯を唇の隙間から覗かせ、ぴんと伸ばされた耳は時折小刻みに動く。黒い鼻の先はじとりと湿り気を帯びて寒々しい。兄のお気に入りのスーツを犬のような獣が着ている。

黒い獣人と、樹木の化身たる少女。

不可思議な存在は、けれど、当たり前のように呼吸をしている。

何度見たか知れぬ景色に、いつの間にか眩暈を起こすこともなくなった。ああ、そうだ、と冷静に考える。この部屋で異質なのは、人間の鶯太郎だ。

少女は妖艶な微笑を浮かべ、哀れむように目を細めた。

兄が人間の姿を捨ててしまったのは、祖母の葬儀が終わり、漸く生活が元の静寂を取り戻した頃のことだった。日暮の歌が、晩夏の空に余韻のように響いていた。

夕闇の迫る家の中は薄暗く、縁側に座る夢彦の表情はぼんやりと霞んでいるようだった。夢心地に兄は呟いた。低く透き通る声音で。

「人間をやめようと思う」

あまりにも唐突な告白に、鶯太朗はどのように答えればいいのか考えあぐねて「そう……」と曖昧に頷いた。今思えば、あの時、はつきりと「馬鹿なことを言うな」と答えていれば、或いは思い留まってくれていたのかもしれない。けれど、鶯太朗の記憶する限り、夢彦は一度として人の意見に左右されたことがないのだ。

そうして、なんてことないように、夢彦はその日を境に人間をやめてしまった。

黒い獣の姿は幻想的で美しく、そして恐ろしくもあつた。

その異質な姿にすぐに慣れてしまったのは、幼い頃から異質なものがまわりに息づいていたからだ。春の女神である佐保姫が鎮座するこの町は、大昔から不思議なものたちと共存してきた。小川に河童が棲んでいたとしても、空を天狗が飛んでいたとしても、なんてことない。時を経て精霊を宿した樹木も——その化身が家上がりこんだとしても、「ようこそいらっしやいました」ともてなす。

夜明けが少しづつ早くなってきた。台所の窓から見える山間はが曙色に染まりはじめていた。鶯太朗は手をすり合わせ、小さく白い息を吐き出した。

朝起きて、顔を洗い、まず取り掛かるのは味噌汁作りだ。夢彦と二人暮らしになってから、料理をするのは鶯太朗の仕事となった。祖母が遺した季節の食材などを丁寧にまとめた料理ノートに助けられながら、随分と上達したものだと思う。朝一番に鼻腔をくすぐる味噌の香りは格別だ。

朝食の準備を終え、夢彦の部屋へと向かう。兄の部屋はこの家にたった一つだけある離れの洋室だ。扉を開くと、いつものように書物の積み上げられた桐の机に突っ伏して眠る夢彦の姿があつた。黒い塊は規則正しく上下している。広い部屋であるはずなのに三方を本棚に囲まれているせいで狭く感じる。窓側に視線を送れば、ベッドには椿乙女の化身たる少女が横になっていた。眠っているというよりもまるで死んでいるみたいだ、と思う。

すうっと、前触れもなく少女が身体を起こした。黒曜石の瞳が鶯太朗を捉え、小首を傾げる。

「おはよう」

口元に微笑を浮かべ、少女は言葉紡いだ。

「おはよう、乙女さん」

鶯太朗は少し身構えるように返した。

樹木の化身というのは、何を考えているのかわからない。

乙女椿の植えられている寺を何度か訪れたことがある。庭の隅で可憐に花を咲かせる乙女椿には不思議と目を惹かれた。化身の少女はいつもぼんやりと空を眺めていた。その横顔はいつも夢げに見えたものだ。

「しばらく彼女を預かることになったんだ」

兄はお味噌汁を一口飲むと、まるで天気の話をするように言った。昨晚、夢彦は疲れているからとすぐに自室に閉じこもってしまったので、事情を聞けなかった。

「困り果てていたみたいだし」